

一 次の文章を読んで後の問に答えよ。

飛騨の高山から山奥へ入って、またその山奥から、さらに山へ入ったところにある古い寺へ行った。そこに集められている[㊦]円空仏を見たかったからだ。つた。

高山では気配もなかったのに、山へ入るころから雪が[㊦]しなないだ。フロントガラスへ矢のようにあたってくる、運転手君はワイパーにたまる雪を気にしながら^aジヨ行した。両側は大杉である。杉の梢にたまっていた雪のかたまりが、車の振動でか、時にばさつと落ちてきて、他の枝にあたつてくだけるので、先が見えなくなつた。

何度止まったかしのれない。杉林がきれいと雑木の茂つた斜面に沿うて、また杉林がきて、車はたびたび、急角度のハンドルを切つた。

「こんな山奥に、寺があるんですか」

「はい」

と運転手君はバックミラーをにらんだ。わきの座席に、F市からきた案内の人がはらはらしていた。六時にF市へ入って、ぼくは講演せねばならない任務があつた。時間を気にして、円空仏を見るのはあすにされては、とその人はいっていったのだ。それを、都合をつけて行つてくれないかと頼んだのだった。案内の人は講演の時間におくれたら責任がある。山へ入ってから雪は計算になかつた。車は里の道のようにスピードが出ない。

「大丈夫だろうね、きみ」

「大丈夫でしょう」

雪はひどくなつてきて、杉林も雑木林も乳色にかすみはじめた。

「こんな山奥へ、円空さんは来てたんですね」

「そうですよ、きつと、脚の丈夫な方だったんでしょ」

と案内人。

「そこらじゅうの木を伐つて、仏さんにして歩いた人だから、脚も手も丈夫じゃないと……」

と運転手君。そんなことをいつてるうちにようやく、S寺の入口が見えてきた。海^bバツ何メートルあるか知らないが、ずいぶん高みまできた感じだった。S寺の標柱のあるところを左折した。前方に灯のついた[㊦]庫裡らしい建物が見える。本堂が白い屋根をみせて、そのうしろに建っている。車がゆけるところまできて、ぼくらは、凍つた外へ出た。うしろにももう一台ついてきて、これもF市の人々だった。風が強かった。

「早くしないと」

と誰かがいつている。ぼくは、杉木立が、足もとにみえ、その前方にひらけた遠い谷を見ていた。粉雪のなかにそれらしい谷間がかすんでいた。

「あれが宮川ですか」

「そうですよ」

と案内人。川だとはつきりしないけれど谷の底に^cダ行する線が黒い。

「さあ、それでは、和尚さまにちよつとあいさつしてから円空さんをみせていただきましょうか」

案内の人はせきたてた。庫裡へ入ると、ひろい土間があつた。ついたての向うで炉火が燃えていた。^Aぼくらがくることを待つておられた様子が、その火に出ていた。と、ついたての向うから、赤ん坊を背負つた三十二、三の奥さまが出ていらして、

「いらつしやいませ。どうぞ、おあがり下さい」

丁寧に辞儀された。案内の人は、雪みちのため、おそくなった、といつて詫びた。奥さまは、につこりして、さあどうぞ、とぼくの方にもお辞儀された。車の中は温かつたけれど、外へ出ると寒かつた。少し風邪気のことっていたぼくはコートをぬいだのをまた背に羽織つて、あいさつした。

「どうぞ、火にあたつて下さい」

ぼくらは炉のよこに四人ならんですわつた。大きな古い炉だった。まん中で赤い[㊦]オキが出来ていて四、五本の薪が燃えていた。湯わかしかから湯気が立っている。煤けた時代物の[㊦]自在がめずらしい。奥さまは、子を背負つたまま、茶を入れて下さる。

「少し風邪をめておられます」

とぼくのことを案内人がいつた。

「さようでございますか、遠いところをご苦労までございました。主人はいま、本堂で、お経をあげております。しばらくお待ち下さい。すぐすみすから」

奥さまは、四人に茶をくばると奥へひっこんで、新しい薪を三本抱えてこられた。よくかわいた櫟くわきか栗かの薪だった。

「どうぞ、もう少し火のそばへおより下さい」

奥さまはそういつて、その三本の薪を惜しげもなく、燃えている火の上にかさねられた。充分な燃えだつた上に、三本の追加は多くの風邪気を心配してのことだったろう。背中が寒い。寺の建物は天井も、ユカも高い。山の上の大杉の木立の中だから、北風が、玄関口で吹きあれている。雪も乱れている。しばらくして温もってきた。薪がいつそう燃えはじめた。 ^B案内人の一人が本堂へ行っていたが何か廊下を話しながらきて、和尚と表へ立った様子だった。

「早くしないといけませんから」

ともう一人の市の人がいった。

「和尚さまが先に行つて円空館の扉をあけて下さいます。……どうぞ」

早くしてくれ、といつていることがわかる。しかし、燃えだした薪が気になった。もう少しそこにいたい。子を背負つた奥さまには、奥からもう一人の二、三歳の男の子がきて、何かぐずつていた。おとなしくするように、とたしなめて、炉の薪の燃えをよくしようと奥さまは懸命だった。汗ばんだ奥さまの額が赤くほてっている。ぼくは、三本の薪のくべ足しに、いまもう少し時間をわすれていたという思いにかられていた。案内人たちはみな立ちあがっていた。

「早く出立しないと、おかれてしまいます」

ぼくをせきたてる。奥さまの顔を見てそれではといつてぼくも立った。奥さまは、「左様でございますか」といつて案内の人々を見ておられた。折角の薪が燃えさかつていた。思わず口に出た。

「^Cもつたないと思われませんか、奥さまのくべて下さった ^D心づくしが、いまさかんに燃えていますよ。もう少し当たつていかれたらいかがですか」

^Eあとはいえなかつた。

結局ぼくはせきたてられるまま、庫裡を出て円空仏の ^eチン列館へ向かつたのだった。玄関を出るとき、土間で丁重にお辞儀なさる奥さまに失礼を省みずきいた。

「お子さまは何人いらっしゃいますか……」

「はい、三人」

と奥さまはにつこりし、

「どうぞ、お風邪にお気をつけてお帰りください。ご気分のわるいのに、おいで下さつたのに何のおもてなしもできず、ありがとうございます」

外は雪だった。降りがひどくなつていた。

これだけの話だが、東京へ帰つてからも、いや新幹線の中でも、薪三本のありがたみがのこつていた。

あの雪ぶかい山奥で、円空仏を守つてくらしておられる奥さまは、今日もお客さまに炉火をめぐんでいらつしやるか。 ^F飛驒の山はふかいところだと思つた。木も人も仏の山にあった。

水上勉「木の聲 草の聲」による

^注 円空仏 江戸時代の僧円空が木を荒削りにして作つた仏像。全国で五千体以上が発見されている。

しないだ 「横から激しく降つた」という意味。

庫裡 寺の台所、また寺の家族が日常住む部屋。

オキ 赤く起こつた炭火。

自在 ^{じざいかざ}自在鉤。いろいろなどの上からつるし鍋などを火にかける道具。自由に高さが調節できる。

問一 傍線部 a～e のカタカナの部分の漢字として最も適当なものを次の①～④の中からそれぞれ一つ選んで記号で答えよ。 解答番号 a① b② c③ d④ e⑤

- | | | | | | | | | | | | |
|---|-----|----|----|----|----|---|-----|----|----|----|----|
| a | ジョ行 | ①除 | ②叙 | ③徐 | ④助 | b | 海バツ | ①伐 | ②罰 | ③閥 | ④抜 |
| c | ダ行 | ①陀 | ②墮 | ③蛇 | ④舵 | d | ユカ | ①縁 | ②床 | ③軒 | ④畳 |
| e | チン列 | ①棟 | ②陳 | ③珍 | ④諫 | | | | | | |

問二 傍線部A「ほくらがくることを待つておられた様子が、その火に出ていた」の内容の説明として最も適当なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。 解答番号⑥

- ① 筆者たちが到着したのに炭に火がついたばかりでまだ火の勢いが弱かった。
- ② 筆者たちが到着するのを待つて火を継ぎ足そうとして構えていた。
- ③ 筆者たちが到着するのに合わせてとっておきの薪を燃やそうとしていた。
- ④ 筆者たちが到着する頃に合わせて炉の火勢が増すようにされていた。

問三 傍線部B「案内人の一人が本堂へ行つていた」とあるが、本堂に行った目的として最も適当なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。 解答番号⑦

- ① はやく読経をすませるよう促すため。
- ② ひとり早く円空仏を見るため。
- ③ 奥様の言うことが本当か確かめるため。
- ④ 和尚の読経で仏様にお参りするため。

問四 傍線部C「もつたいたい」は何に對して言っているか。適当でないものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。 解答番号⑧

- ① 燃えている炉火に對して。
- ② 良質の薪に成るまでの時の蓄積に對して。
- ③ 奥様の慈愛深い真心に對して。
- ④ 困難な雪道をやってきた筆者たちの苦勞に對して

問五 傍線部Dの「心づくし」のこの場面での意味として最も適当なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。 解答番号⑨

- ① 質素な手作りの薪
- ② 真心のこもった薪
- ③ 母性愛のこもった薪
- ④ 飛驒特有の櫟くぬぎか栗の薪

問六 傍線部E「あとはいえなかった」の理由として最も適当なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。 解答番号⑩

- ① 奥様の気持ちより円空仏の方が大事であると言えば失礼だから。
- ② 奥様の気持ちに感激したあまりに声が詰まってしまったから。
- ③ 自分が円空仏を見たいと頼んだことで予定が窮屈になったから。
- ④ 事務的な対応しかないF市の人や案内人に腹が立ったから。

問七 傍線部Fの「飛驒の山はふかいところだと思った。木も人も仏の山にあった」にこめられた筆者の思いとして最も適当なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。 解答番号⑪

- ① 長い時をかけて完全に乾燥させた薪の貴重さは、飛驒の人でなければ分からないと悲観している。
- ② 寒さの厳しい飛驒では、薪をくべ足すのが一番のもてなしだと理解できないお役人に憤っている。
- ③ 仏様のような慈愛深い人情を育てる飛驒という仏教的な風土の奥深さに心から感激している。
- ④ 飛驒はすべての生計を山に依存していて、円空が仏像を彫るのに恰好の場所だと感心している。

二 次の記事を読んで後の問いに答えよ。

人間は親を選択することはできないが、友を選ぶ自由は認められている。友人を選択する方法は人によって千差万別だが、選んだその友人によって自分の人生が大きく変わることがあるものだ。友人という存在は、親ほど身近ではないが、やはり自分の人生にプラスとなるもの、逆にマイナスとなるものを豊かにもっているものである。

私は、今もそうだが、常に身近なところに尊敬できる人物をさがし求め、その人から何かを学びとろうとしてきた。意識してそういう学び方をするようになったのは、おそらく中学生の頃からではなかったかと思う。これは多分に私の性格によるものかもしれないが、そればかりとはいえない。

生まれながら才能に恵まれた、あるいは向学の家庭に育った子供なら話は別だが、そうではない並の頭をもち、

並の家庭に育った子供が勉強していくには、その方法しかないと自覚していたからである。今ふり返ってみて、これは私のような人間にふさわしい、最もいい学び方だったと思う。

人と人との出会いには、もちろん運不運がきまとう。友人との出会いも同様である。この意味で、私は幸運だったといえる。すでに中学校に入った時から、^①このような学び方を自覚していた私に、学問の上で、ひいては人生の上で後々まで役立った価値のあることを教えてくれた友人を、幾人かもつことができたからである。

戦争^a たけなわの昭和十九年四月、私は由宇町から汽車で三十五分の所にある山口県立柳井中学に入学した。

当時の中学は四年制だったが（五年で卒業してもよかった）、戦争が終わって間もなく、中学四年が修了した昭和二十三年四月、学制改革があつて、四年生はいきなり新制高校の二年に進むことになった。つまり私は、旧制の柳井中学に四年通い、新制の柳井高校に二年通い、そしてその第一回目の卒業生になったわけである。

この中学、高校時代を通して私が親しくしていた友人の一人に、藤本繁という同級生がいた。

彼は学校の成績がとびぬけてよかったわけでもなかったが、学校で特異な存在とみなされていた。寡黙な性格で、ほとんど誰とも口をきかずに、いつも孤立して何か「沈思^b」考しているような男だった。藤本君はそのために「へんくう」というあだ名をつけられていた。偏屈者^bというほどの意味である。いずれにせよ、いつも黙りこくっているために、かえって彼は目立っていたのである。

そういう彼に、私はいつの頃からか近づいていって、口をきき合うようになった。なぜか関心をもったのだ。今考えてみると、なぜ彼に関心をもったのか、（A）見当がつく。私は今でもそうだが、ひどくあけっぴろげな人間で、誰とでも語り合いそれを愉^{たの}しむところがある。だが、その反面、独りになってじつとものを考えたいのも大好きなのだ。そこには、人と交わっている時の私とは別人のような私が、確かにいるのである。孤独の中で思考することを愛する、もう一人の私が、おそらく藤本君に関心をもち、接近していったのだらうと思う。また彼は彼で、私のそういう反面を感じとっていたから私とつき合えたのに違いない。

彼と私は、通学の途中、哲学とは何かとか、芸術は社会に役立つかとかの問答をしたり、一緒に考え込んだりした。私が「シヨパンの音楽は、きれいな音の組み合わせだ」というと、彼はしばらく考えて、「いや、シヨパンほど情感の深い音楽を創る作曲家はいない」という。「情感とは何だ」と問うと、彼はまた考え込むといった情景であつた。

このように、彼と私の会話は、（B）現実離れた命題、いいかえれば^②哲学的な問題についてのお互いの考え方、意見の交換である場合がほとんどだった。

由宇の一つ先の神代^{こうしろ}という駅から毎朝汽車に乗って来る彼と私とは、車中で、また駅を降りて学校に向かう途中で、互いにポツリポツリと哲学的な言葉を交わし合った。学校の勉強とはおよそ無縁な、（C）雲上の問題であつても、二人にとっては深刻な、大切な問題だったし、また二人とも、それを深く考え合うことをどこかで愉しんでいるところがあつた。

余談であるが、近年、哲学者の梅原猛氏と対談する機会があつて、こんな会話を交えたことがあつた。

梅原氏が、フィールズ賞の対象になった私の理論がわからないというので、「特異点解消」を前述したような例えで説明すると、梅原氏は、

「いや、実に哲学的な話やね。哲学の話を数学で証明しているみたいだ。存在論やね」といわれた。

それに対して私は、

「数学というのは、最終的には論理的にやらなきゃいかんから、問題をどんどん制限していつて、定式化して、やっと証明できるんですよ。だけど数学にしても出発点は人間が考えるわけだから、その背景には絶えず曖昧^{曖昧}□糊としたものがあるから、フィロソフィ（哲学）ですわ」と答えたのである。

フィロソフィ——数学という学問は、まさにその人間の哲学から出発するのである。そういう点で、青春時代に、藤本君と学校の勉強を離れて、哲学的な話を交えることができ、彼のような個性を知り得たことは有意義だったといえる。

（C）話をもどそう。私は母から、考えることの喜びを学んだ。考えることそのこと自体に価値があることを教えられた。そしてこの藤本君と知り合い、語り合ったことで、ものを深く考える力が促進されたと思う。ものを深く考えるというが、やみくもに、何でも深く考えるのはあまりすすめられたことではないだろう。目にとまるもの、耳に届くことすべてを深く考えていては、（D）仕事がかどらない。しかし長い人生には、ここ一番、深く考えなければならぬ時が何度もあるはずだ。

例えば、私の父が経験したように生活上の危機が、誰の人生にも絶対に襲ってこないとも限らない。あるいは、自分や肉親の誰かがとんでもない過ちを犯して、死を選びかねない。傷心に陥るようなことも、長い人生にはないとは限らないのである。私は、そのような時こそ人間に深くものを考える力、深い思考力が要求されると思う。立ち直る見通しがまるでつかない、どこから手をつけて解決すればいいのか見当がつかない、そのような大問題を抱え込んだ時、頼りとなるのは自己の思考力であり、それ以外にはないと思うのだ。

藤本君との交友から学んだ、ものを深く考える力を、私は自分の人生にそのように生かしてきたつもりである。「人間は考える輩である」と、パスカルはいった。考えない人間はいないのである。だが、ここ一番という時に、より深く考える力、素養を身につけておくことは、^③親の手を離れる前には是非ともやっておくべきことだと思う。実は、私たちが勉強する目的の一つは、この思考力をつちかうことにあるのだ。

広中平祐『生きること学ぶこと』による

問一 傍線部ア～ウの□に漢字を補って四字熟語として完成させよ。答えは次の①～⑦の中から適当なものをそれぞれ次の中から選んで番号で答えよ。

- ①歳 ②潜 ③黙 ④点 ⑤模 ⑥粘 ⑦別
- 解答番号ア 12 イ 13 ウ 14

問二 傍線部①の「このような学び方」の説明として最も適当なものを次の①～④の中から選んで番号で答えよ。

解答番号 15

- ① 身近にいる尊敬できる人を常に探してその人から学び取るという学び方。
 ② 常に身近な問題について討論を繰り返して考えをより深めるという学び方。
 ③ 哲学の話を数学で証明するために様々な友人と学び会うという学び方。
 ④ 広く友人と交際して多くの人の長所を自分のものにするという学び方。

問三 波線部a～cの言葉の意味として適当なものをそれぞれ①～④の中から選んで番号で答えよ。

解答番号 a 16 b 17 c 18

- a たけなわ ①春に浮かれている頃 ②始まったばかりの頃 ③終盤に近い頃 ④大変盛んな頃
 b 偏屈者 ①性格が素直でない人 ②短気な性格の人 ③孤独を好む人 ④利己的で横着な人
 c 傷心に陥る ①相手を深く傷つける ②精神的なダメージを受ける ③恋に悩む ④理性をなくす

問四 (A)～(D)に入る言葉として適当なものを次の中から選んで番号で答えよ。ただし、(A)と(B)には共通のものが入る。

解答番号 A 19 B 20 C 21 D 22

- ①いわば ②およそ ③第一 ④さて

問五 傍線部②「哲学的な問題についてのお互いの考え方、意見の交換」はどのように役立つかの説明として最も適当なものを次の①～④の中から選んで番号で答えよ。

解答番号 23

- ① 深い思考力を養い、苦境の時でもそれに支えられた行動ができる。
 ② 苦境の時、考え過ぎなくてすむように事前に答えが整理されている。
 ③ 解決のつかないような難問にも、互いにアドバイスをして助け合う。
 ④ 哲学者との対話をするために何でも深く考える習慣が身に付けておく。

問六 傍線部③「親の手を離れる前には是非ともやっておくべき」という理由として最も適当なものを次の①～④の中から選んで番号で答えよ。

解答番号 24

- ① パスカルの言葉の真意を若いうちに正しく理解しておく方が人生の逆境に強く立ち向かう力になるから。
 ② 親の支援に頼ってばかりいると親が亡くなったあとどうして生きていけばいいか分からなくなるから。
 ③ 一般的には親が先に死ぬが、親と死別した後でも親の影響は心のどこかで受け続け、断ち切れないから。
 ④ 今後自立して厳しい現実に向き合って生きていく時、頼りになるのは最後には自身の思考力だから。

問七 筆者の友人を選ぶ観点として最も適当なものを次の①～④の中から選んで番号で答えよ。

解答番号 25

- ① 開けっぴろげに明るく語り合い誰とでも親友になれる。
- ② 深く考える習慣や力がついて人生にとって真に役に立つ。
- ③ 学業成績がよく、周囲への気遣いもできて気が利く。
- ④ 人生の苦境に立たされたとき精神的に支えてくれる。

問八 この文章の内容に合致しないものを次の①～④の中から選んで記号で答えよ。

解答番号 26

- ① たった一人で物事や自己を深く見つめてより深く考える力を養うことが大切である。
- ② たくさんの知識を身につけることによってより深く物事をとらえることができる。
- ③ 友人というものは人生にとってプラスになる時もあるが、マイナスになる時もある。
- ④ 答えのないような深い問題について友人と語り合って深く考える力を養った。

三 次のA～Eの言葉の類義語として最も適当なものを後の①～⑨の中からそれぞれ選んで番号で答えよ。

解答番号 A 27 B 28 C 29 D 30 E 31

- A 我慢 B 交渉 C 起源 D 解雇 E 偉人
- ① 努力 ② 折衝 ③ 発掘 ④ 鈍物 ⑤ 傑物 ⑥ 堪忍 ⑦ 発祥 ⑧ 待遇 ⑨ 罷免

四 次の各文の(A)～(G)の中に入る熟語として最も適当なものを後の①～⑨の中からそれぞれ選んで番号で答えよ。

解答番号 A 32 B 33 C 34 D 35 E 36 F 37 G 38

- A 総理の施政方針演説を聴いたある野党の党首は、(A)する価値もないと批判した。
- B (B)のサラリーマンにすぎない私に家用飛行機などは夢のまた夢です。
- C その残虐な凶悪犯人には(C)の良心もない。
- D ライオンが忍び寄るのを見つけたシマウマたちは(D)に逃げだした。
- E 我が社の製品を買ってもらうように熱い思いで訴えたのにすげなく(E)された。
- F 世界には多種多様の宗教があるのでそれを(F)に論じることはいできない。
- G 相手チームに終盤まで負けっ放しだったが最後にやっと(G)報いた。
- ① 一介 ② 一矢 ③ 一顧 ④ 一律 ⑤ 一蹴 ⑥ 一散 ⑦ 一片 ⑧ 一喝 ⑨ 一円

五 次のA～Eの短文について、言葉が正しく使われているものは①を、誤って用いられているものは②を記せ。

解答番号 A 39 B 40 C 41 D 42 E 43

- A 愛想を振りまく。 B 熱にうなされる。 C ひとつ返事で引き受ける。
- D 語弊がある。 E 雪辱を果たす。

六 次のA～Gに該当する作家を後の人物群から選んで番号で答えよ。

解答番号 A 44 B 45 C 46 D 47 E 48 F 49 G 50

- A 昭和四十三年日本人で初めてノーベル文学賞を受賞した作家。
- B 「富士には、月見草がよく似合う」の一節で有名な『富岳百景』の作者。
- C 詩人になれず虎となった青年李徴の悲劇を描いた『山月記』の作者。
- D 『死者の奢り』『飼育』などの作者で我が国二番目のノーベル文学賞を受賞した作家。
- E 故郷岩手で農業指導をしながら創作活動をし、「雨ニモマケズ」の詩で有名な詩人で童話作家。
- F 『蟹工船』『不在地主』などの作者で、昭和八年に権力の弾圧により獄中で死亡した作家。
- G 『大つごもり』『たけくらべ』等の作者で明治時代的女流文学の華といわれる薄幸の作家。

人物群

- ① 尾崎紅葉 ② 泉鏡花 ③ 小林多喜二 ④ 樋口一葉 ⑤ 大江健三郎
- ⑥ 太宰治 ⑦ 宮沢賢治 ⑧ 川端康成 ⑨ 中島敦